

娘の自己受容の源泉としての父親 － 3 要因仮説の検討と父娘関係尺度構成の試み －

中丸澄子¹⁾・篠原稚恵²⁾・坂本 萌³⁾・末島千穂⁴⁾・上杉美和⁵⁾

Father, a Source of Self-Acceptance for his Daughter － An examination of three- factor hypothesis and a tentative construction of scale for father-daughter relationships －

Sumiko NAKAMARU¹⁾, Chie SHINOHARA²⁾, Moe SAKAMOTO³⁾,
Chiho KURUSHIMA⁴⁾ and Miwa UESUGI⁵⁾

要 約

父子関係に関する心理学的研究は1970年代から盛んに行われるようになり、父娘に関する研究も活発になっている。その中で、娘の健康な人格形成に父親が深く関与していることが多数の研究で明らかとなり、特に、娘の自己受容、自尊心形成に父親が時には母親以上に強い影響を及ぼすことに、諸研究結果は一致している。本論では、主としてわが国における父娘関係についての研究を概観した上で、筆者のゼミで展開され、卒業論文、修士論文として報告された父娘関係研究の流れを追い、娘の自己受容に関わる「娘の内なる父親」の存在と、その機能に関して調査を通じて浮かび上がってきた三つの要因、そして尺度構成までを考察し、我々の仮説を検討する。

キー・ワード：父娘関係、自己受容、女子青年

1. はじめに

娘にとっての父親、また、父親にとっての娘には、単純な言葉で開放的に語ることはできない、とても情緒的で、また微かに秘め事のにおいがする部分がある。それ故ではないだろうが、父娘関係に関する研究は、欧米でも日本でもあまり行われてこなかった。

従来の親と子に関する心理学研究では、子の発達、人格形成、感情特性などに及ぼす母親の影響を扱ったものは膨大な数に及び、父親と息子の関係を扱ったものも、特に性同一性形成との関係を探る研究を中心にそれなりにあるが、父親と娘の関係を取り上げた研究は多くはなかった。しかし近年になって、父親が娘に及ぼす様々な影響、特に愛情供給者としての父親が娘

の人格形成や自我同一性形成、性役割取得、セルフエスティーム形成などに母親と同等の、否、母親以上の影響を及ぼすとする研究が次々と報告されるようになり、親子関係の研究に新たな展開を見せている。

広島文教女子大学心理学科および大学院臨床心理学コースの筆者のゼミナールにおいても、上杉（2006）が最初に卒業論文テーマとして父娘関係を取り上げたのを皮切りに、父親の思いも寄らぬ娘への影響力が明らかとなり、次々とゼミ生たちが卒業論文・修士論文のテーマとして父娘関係研究に取り組むこととなった。本論では、主としてわが国における父娘関係についての研究を概観した上で、筆者のゼミで展開され、卒業論文、修士論文として報告された父娘関係研究の流れを追い、娘の自己受容に関わる「娘の内なる父親」の存在と、その機能に関して調査を通じて浮かび上がってきた三つの要因、そして尺度構成までを考察し、我々の仮説を検討する。

1) 広島文教女子大学人間科学部心理学科

2) ますだ小児科

3) 愛知県厚生農業協同組合連合会 愛北看護専門学校

4) 広島文教女子大学大学院人間科学研究科

5) 広島市こども療育センター

2. 近年の父娘関係研究の流れ

Lamb (1979) は、1970年代後半を父親再発見の時代であると言う。彼はこの当時の父子関係研究を展望して、幼児との関わりという点で父親は量的には母親に格段の差をつけられているが、一方、質的な関わり、特に情緒的な関わりにおいて母親を凌駕する面もあり、その当時の研究のほとんどが、幼児の愛着形成に父親は母親と同等の影響を及ぼしていることを指し示している、と述べている。彼はこのレビュー論文で、特に父娘関係に焦点を当てたわけではないが、父親欠損が子に与える影響を取り扱った研究を展望する中で父親が娘に与える影響の大きさに論が及び、父親の男性性が娘の女性性と関係しているという諸研究結果の一貫性を指摘している。また、Cole-DetkeとKobak (1996) は、摂食障害や抑鬱症状をもつ女子大学生に成人愛着面接 (Adult Attachment Interview, AAI) を行った結果、摂食障害の女子学生たちからは、その父親が概して情緒的に冷淡であり、娘に対して非常に批判的であって、父娘間の関わりが乏しいことがうかがわれた、と述べている。

わが国においても、1980年代から、父娘関係を扱う研究が見られ始めた。春日 (2000) は、わが国における父娘関係の研究を展望して、父親が娘に与える影響を①女性の女性らしさ、②自我同一性形成、③女性の男性性、④self-esteem形成、⑤性非行・性行動、の5分野に研究内容を分類し評論している。そして、女性性、性役割、性同一性の獲得に父親の果たす役割が大きいことを指摘する研究が多いこと (西沢・早川, 1995)、娘の女らしさの発達には母親よりも父親の方が重要な役割を果たすこと (馬場, 1984) を紹介し、良い父娘関係が娘の性役割や性同一性獲得を促進する一方、従来は男性的特質とされてきた、自己主張、意志の強さなどの積極的特性の獲得も促進する (佐藤・赤澤・寺川, 1996) と述べている。self-esteem (S E) との関わりについては、石川 (1985)、田辺 (1980)、高木・藤田 (1988)、徳田 (1981)、辻井 (1992) らの研究を挙げて、娘が父親に対して良いイメージを持つほど、また、父親からの情緒的支持を感じるほど、自律性が尊重されていると感じるほど、娘のS Eが高くなり、逆に、父親が侵入的であり、統制的であり、圧迫的であるほどS Eは低くなる事実を紹介して、父親からの情緒的支持、自律性の尊重、適度な距離で見守る眼が娘のS E形成に大きく関わっていると集約している。

以上の研究成果から、古くはPersons & Bales

(1956) が提唱した、核家族における父親の道具的役割、母親の表出的役割の役割分化は今やまったく影をひそめ、むしろ父親の表出的役割こそ、子が、特に娘が健やかな人格形成を行う上に必須であると考えられるようになってきている。諸井 (2006) は女子青年を対象に、父親との日常接触と、父親に感じる魅力 (小野寺 (1984) の尺度を使用) について調査した結果、父親との日常接触は統制と情動的絆の2因子から成り、情動的絆が父親の人間としての魅力にも異性としての魅力にも大きく関与することを報告している。

以上のように、父親が娘の同一性形成、性役割取得、S E形成など、健康な人格形成に顕著な影響を及ぼすことに、最近の研究結果はほとんど一致しており、その結果の一貫性、再現性の高さは驚くほどである。

3. 筆者のゼミナールにおける父娘研究

1) 幼児期・児童期に受けた両親からの身体接触量と自己受容についての研究

抱っこや愛撫、身体を触れ合う親子の遊びなど、motheringやskin-shipと呼ばれる親の行為と、それを通じての接触感覚が、子の愛着形成を始めとする人格形成と子の心身の健康な育成に大きな力をもっていることは、古くはHarlow, H.F. (1959) が、布と針金の母親に養育されるサルによって実験的に明らかにし、乳児にとって愛情とは、身体的接触、暖かさ、揺れ動く感覚にほかならないとの結論をくだした。Bowlby, J. (1951) は、このような愛情に満ちた身体接触を含むケアを欠いた状態をmaternal deprivation (母性剥奪) と呼び、いわゆるhospitalismで総称される様々な心身の障害を出現させることを報告して大きな反響を引き起こした。その後も、幼児期における両親からの身体接触量と成人後の精神健康や性格傾向との関連を見た研究は多い (山口・山本・春木 (2000)、山口 (2003) など)。

上杉 (2006) は卒業研究で、山口ら (2000)、山口 (2003) を参考に、幼児期に受けた両親からの身体接触量と、攻撃性、自尊感情、向社会的行動との関連を、女子大学生91名を対象に調査した。身体接触は、父親・母親ごとに、幼児期～小学校低学年までに期間を限定して、受けた量を5段階で回想評価してもらう方法をとった。身体接触の内容は、抱っこやおんぶをされた、一緒にお風呂に入った、たかいたかいをしてもらった、など養育的、愛情供給的、身体遊び的なpositiveなものに限って、上杉が質問票として項目構成した。攻撃性については、安藤・曾我・山崎・島

井・嶋田・宇津木・大芦・坂井（1999）の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問票、向社会的行動については、菊池（1988）による向社会的行動尺度（大学生版）を用いた。自尊感情については、山本・松井・山成（1988）の尺度を用いた。以下、結果の概略を述べる。

両親からの身体接触量を高い群、低い群に分け、その組み合わせで、父高・母高群、父のみ高群、母のみ高群、父低・母低群の4群で攻撃性、自尊感情、向社会的性を従属変数として分散分析した結果、攻撃性の敵意因子と自尊感情の自己承認因子及び自己満足因子、向社会的行動に関して両親からの身体接触量の主効果が有意であった（攻撃性敵意： $F(3,44) = 2.99, P < 0.05$ 、自尊感情の自己満足： $F(3,44) = 3.10, P < 0.05$ 、自尊感情の自己承認： $F(3,44) = 4.50, P < 0.01$ 、向社会的行動： $F(3,44) = 3.29, P < 0.05$ ）。多重比較の結果、父の身体接触が高い群が最も敵意が低く、自己承認得点は最も高かった。さらに、身体接触と自尊感情の間の相関を見ると、父親からの身体接触量との間に有意な中等度の相関があり（自己満足： $r = 0.43, P < 0.01$ 、自己承認： $r = 0.47, P < 0.01$ 、自己肯定： $r = 0.38, P < 0.01$ ）、一方、母親からの身体接触量と自尊感情との間には有意な相関はなかった。このように、父親から受けた positive な身体接触が攻撃性を低め、向社会的行動と自尊感情を高めており、自尊感情に関しては幼児期に受けた父親からの身体接触が、母親から受けたもの以上に自尊感情と関連していることが認められた。上杉はこの後も修士論文において父親の身体接触量と娘の自尊感情の、母親を凌駕する結びつきを再確認した（上杉, 2008）。さらに S C T によって父親、母親について記述してもらったところ、自尊感情の高い群には父母ともに肯定的な記述が多く見られたが、父親像、母親像についての顕著な特徴の相違は読み取れなかった。しかし、母親の専売特許と思われていた幼児への positive な身体接触を通じたかわり、それ故に mothering という呼称が与えられていたのであるが、それを父親も頻度は母親より低いものの行っており、しかも娘の自尊感情形成に深く関与している可能性が見えたことは、大きな発見であった。娘は父親との情緒的肯定的関わりから、母親からのものとは質的に異なる何ものかを受け取り、それを内在化して成人後も内なる父親との対話を続けているのではないかと考えられた。或いは情緒的肯定的関わりを通じて内在化された父親が娘の自尊感情を鼓舞する無言のメッセージを発信しているとも考えられる。春日（2000）も、臨床経験や事例研究から指摘さ

れる父親は、娘との関係において考察されたものであり、娘の心の中にある、イメージとしての父親と考えるのが妥当であると述べている。

2) 娘は父親をいかに内在化するか

篠原（2009）は上杉（2006）、上杉（2008）の研究を引継ぎ、娘の中に内在化された「内なる父親」が、娘が自分の存在の意味を認め自己を価値ありとする自己受容に決定的な影響を与えているのではないかという問題意識のもとに、娘がいつ頃から、どのように、いかなる体験を通して父親を内在化し、その「内なる父親」をどのように自他に対する認知や行動に作用されているかを探るため、インタビューに基づく質的研究を行った。

方法として、私立大学の女子学生7名に、児童期から現在に至るまでの父親との関わりを時系列的に語ってもらった。面接は一人一回、90分間行った。面接は以下の質問項目を軸とした半構造化面接である。①父親との一番古い思い出、②子どもの頃、父親にしてもらったこと、③一番印象に残っている父親との思い出、④父親との体験がどのように今とつながっているか、⑤現在、父親を意識したり必要とする時は？ ⑥あなたにとって父親とは？ ⑦父親に対する意識の変化。語りは協力者の同意を得て録音し、逐語記録に起した。この逐語記録をデータとして、「対象者の中に、様々な体験を通していかに父親が像を結んでいくか」を分析テーマに、木下（1999）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による分析を行った。データは切片化せず、分析テーマに沿って選び出した発言文脈を協力者内、協力者間で比較照合を行った。その結果、24個の概念が生成され、次にそれらの概念を10個の1次的カテゴリーにまとめ、さらに3個の2次的カテゴリーにまとめる収束化を行った。一次的・二次的カテゴリー及び概念と、カテゴリー間の関係を表すダイアグラムをそれぞれ表1と図1に示し、3個の二次的カテゴリーについて説明する。

【養育性】

娘は幼少期より、父親からの、特別なご褒美という感じの愛撫や身体を用いた遊びを通じて、母親とは異なる感触の、どちらかというと非日常的な思い出を形成する。この思い出は強烈なものでも、いつでも身近にあるものでもなく、「今にして思えば分かる」程度の薄く透明な感覚である（現在の自分を形成した父カテゴリー）。父親は母親と異なり、距離のある、空気のような存在であり、母親のように、いつでも必要というわけではない（空气的存在としての父カテゴリー）。

表1 概念とカテゴリー（篠原，2009）

上位カテゴリー	下位カテゴリー	概 念 名	定 義
養育性	現在の自分を形成した父	今にしてわかる父親 思い出を作る父 父親ゆえの現在	今、思えば父は〇〇だったという認識 いろいろな思い出を作ってくれたこと 父がこうだったからこそ、今の自分があるということ
	セーフティネット	承認によるサポート 信頼されている確信 ここぞという時の父親の存在感	父親から認められることで頑張ろうと思うこと プロセスを伝えず、決定事項だけ伝えればいい 大切な岐路での、いざという時に必要な父親
	空気の存在の父	時々、父を感じる 時々生じる大切にされている感覚 それとなしの配慮	たまにふっと父親を感じる時があること よく考えれば大切にされていることがわかる なんとなく気を使ってくれる父親
	実利を与える父	物質的援助をする父親	現実的な物での援助
社会性	一言の重さ	稀な叱責の重さ 父親からの承認の重さ	怒られたのがめずらしいから覚えている 認めてもらえないかもしれないことへの不安
	反論不能	最終決定 反論不能	最後に決断する中心人物 怖いけどやはり正しい父
	社会的存在としての父	距離をおいた公平性 社会とつながる父親 働く姿からの尊敬 ルール遵守	誰にも平等で一定の距離をおいた父親 社会につながっている父親が必要 働いている姿を見ることで尊敬の念がおこる 規則や言葉遣いに厳しいこと
	実利	物質的援助をする父親	現実的な物での援助
異性性	ぎこちなさ	父親との居心地の悪さ 硬い話になる会話	何を話してよいかわからないこと 世間話などより硬い話のほうがしやすいこと
	許せる稚さと許せない稚さ	多面性をもつ父親 受け入れられる稚さ 受け入れられない稚さ	〇〇だけど△△な父という多面性 可愛い父 身勝手にルーズな父
	母の配偶者	母親の配偶者としての父親	母に必要なから父が必要という認識

一)。しかし、父から信頼されている、大切にされている、という感覚は、時折、微風のように娘の知覚に呼びかけて、娘にこのままでいいのだという感覚を呼び覚ます。また、ここぞというcriticalな時に立ち現われて、その存在感を顕わにし、娘を安心させる（セーフティネットとしての父カテゴリー）。以上のような父親からの愛情供給的・保護的体験を通じて内在化された父親は、娘を育み形成したものとしてすべての父親イメージの根幹を成すであろうという意味で、父親の養育性と名づけた。

【社会性】

父親は家族のために働き、娘もその労働報酬で養われてきた（実利カテゴリー）。父親からの叱責は母親からより少ないが、ずっと重く子に伝える（一言の重さカテゴリー）。家族の意見がまとまらない時に最終的決定を下し、反発は感じてでも結局は逆らえないと思わせるのも父であることが多い（決定者カテゴリー）。父は母よりも、子どもたちと距離をおいた公平性を保ち、決まりや言葉遣いにうるさい。時折垣間見る父親の働く姿は、家庭での父親とまったく違った尊敬を呼び覚ます。本研究の対象とした女子学生は、卒業・就職が現実的な問題になってくる時期にあったた

め、一層、社会的存在としての父を身近に感じ、社会への水先案内人として父を見るようになっていたとも考えられる（社会への架け橋カテゴリー）。このように、家庭の人である以上に社会の人であり、規範や権威、威厳を娘に示し、また娘を社会へと導く案内人として内在化された父親イメージを父親の社会性と名づけた。

【異性性】

多くの女子学生は父親といることが居心地悪く、会話が続かないという。またどうしても硬い話になってしまう（ぎこちなさカテゴリー）。家にいる時の父親はルーズであり格好の良いものでもない。家庭で見せる子どもっぽい身勝手さが許せない時もあり、稚なさが可愛く見えるときもある（許せる幼さと許せない幼さ）。当たり前であるが、父親は母親の配偶者であり、母が必要である以上父ものけ者にするわけにはいかない（母の配偶者としての父親カテゴリー）。このカテゴリーの発言内容は、概して父親に好意的なものではなかった。これは父親が異性であり、男であることから生じる違和感やぎこちなさ、反感であり、思春期・青年期にある女性特有の感覚であろうと思われることから異性性と名づけた。このカテゴリーは、さ

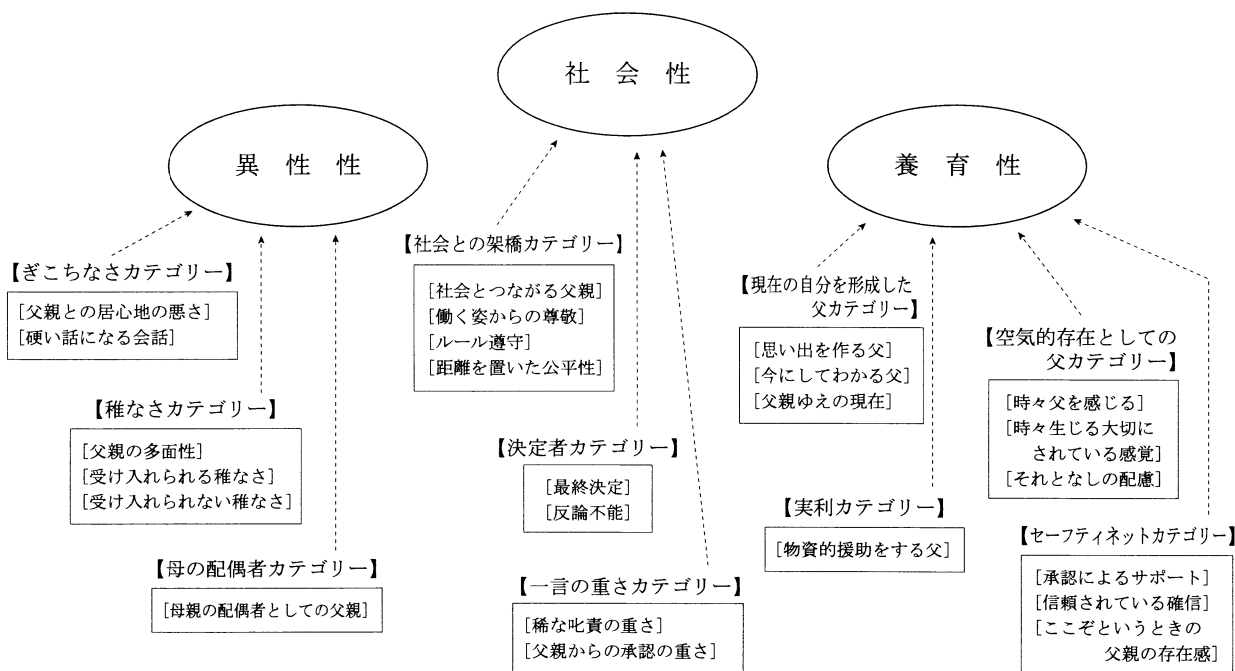


図1 娘の「内なる父親」概念図（篠原，2009）

らにデータを増せばもっと複雑でデリケートなものを含めて奥深い広がりを見せられると思われる。

この篠原（2009）の研究から、これまでも漠然と考えられていたこと、即ち、父親が娘にとって母と同様に自分を養い育み保護してくれる存在であり、母と少し異なるのは、非日常的で記憶に残りやすい思い出をいろいろ重ねてくれた人で、家庭の中に社会を持ち込み、社会へと道案内してくれる可能性を持った人であり、そして決定的に母親と違うのは、異性の親であるということである、ということが面接データを通じて明らかにされた。

自己受容・自尊感情との関連で考えてみたとき、なぜ父娘関係が母娘関係よりも娘の自己受容に影響を及ぼしているのか、その背景がおぼろげながら見えてくる。父親からも母親からも娘は愛情の供給を受け、保護され信頼されれば、自分を肯定的に受け入れ、今の自分を基本的に価値ありとする自己受容・自尊感情は高まるであろう。しかし父親には、母親にはいくらか少ない、或いはまったくない特質がある。それは、父親は家庭の中の人であるだけでなく、それ以上に社会の人であること、娘にとって最も身近な社会人であることと、異性であるということである。幼い時に父親から愛撫や抱っこや力強い身体遊びを通して愛情を注がれ、長じてからも種々の愛情供給を受けることは、

単に親から愛され受け入れられているだけでなく、社会から受け入れられていることであり、はたまた、異性・男性から受け入れられ愛されていることにつながる。これこそ、父親が母親以上に娘の自尊心形成に関与している背景ではなからうか。

篠原（2009）のこの研究から導かれた父の特性は決して目新しいものではなく、これまでも心理学、社会学、人類学など様々な分野で論じられてきたものである。しかし、観念的・推論的に論出したのではなく、生の語りに密着した、先入観を排した分析から得られたものであることに意味があると考えられる。また、養育性、社会性、異性性の父親3要因について、語りのデータをもとに尺度を構成すれば、新しい父娘関係尺度の開発と、娘の自己受容との関連についての数量的検証への道が拓かれる。

3) 父娘関係尺度の作成

坂本（2010）は、上記の篠原（2009）の研究結果に基づき、父娘関係尺度の作成に挑戦した。

父娘関係尺度は、春日（2001, 2003）が同じような観点から尺度構成し、娘の自己受容との関連を分析している。春日（2001）は、臨床家による父娘関係文献5冊、春日作成の女子学生へのSCT調査、様々な事例研究をデータ源として項目を選び、修正・削除を経た結果、「娘の中の父親像」69項目、「娘の心の中の父娘関係」96項目の質問紙を作成した。春日（2003）では、

この尺度を用いて、女子学生の自己受容・自尊感情との関連が分析されている。坂本（2010）は、篠原（2009）の面接データをもとに父親3要因（養育性、社会性、異性性）に属する発言23個を項目として選び、小野寺（1984）の「娘からみた父親の魅力」尺度、春日（2001）の「娘のこころの中の父親像」から採用した項目46個を追加して69項目から成る質問紙を作成し、96名の女子大学生を対象に、5段階評定で回答を求めた。得られたデータは、最尤法により因子分析し4因子を得た。プロマックス回転後の因子負荷量0.4未満の項目21項目を削除して48項目につき再度因子分析した結果、第1因子は、「父は私の相談に乗ってくれアドバイスをくれる」「父は私に人生や社会のことを教えてくれる」「父の生き方は立派だと思う」など【社会へとつなぐ父（寄与率11.22, $\alpha = 0.948$ ）】、第2因子は、「父は私の健康を気遣う」「父は私を見守ってくれる」「子どもの頃、父に肩車をしてもらった」などの【養い育てる父（寄与率5.93, $\alpha = 0.928$ ）】、第3因子は、「父の話し方や声は素敵であると思う」「父の容姿を自慢したいと思う」「父はこんなにかっこよかったんだ、と思うときがある」などの【異性として魅力ある父（寄与率5.88, $\alpha = 0.912$ ）】、第4因子は、「父は私が怠けていると叱る」「父は私のことを何でもしつこく尋ねてくる」「父は私のすることを細かく口を出す」など過干渉に関わる因子で、これは逆転させて【過干渉（逆転して、大人として信頼してくれる父）（寄与率4.96, $\alpha = 0.851$ ）】となった。

さらにこの尺度の因子別得点と、大出・沢井（1988）作成の自己受容尺度との関係を重回帰分析した結果、説明変数としての父娘尺度4因子と基準変数としての自己受容合計得点との間の調整済み r^2 値は、0.161 ($P < 0.01$) で、各因子得点の偏回帰係数 β は、【大人として信頼してくれる父】のみ有意 ($P < 0.05$) となった。

坂本（2010）の父娘関係尺度は項目分析や信頼性・妥当性の検討も不十分であり、現在、来島が修士論文としてその精緻化に取り組んでいる。来島は坂本（2010）が採取した項目を再度吟味して、適切でないものを削除し、文章の洗練されていない部分を修正して作成した質問紙を109名の対象者に回答を求め、因子負荷量0.4以下の項目を除いて因子分析（最尤法）を繰り返した結果45項目が残り、坂本とほぼ同様の因子構成を得た。さらにG P分析を経た父娘関係尺度を表2に示す。ここでは第一因子が「養育性－育み見守る父」（寄与率35.79, $\alpha = 0.942$ ）、第二因子が「社会

性－社会へとつなぐ父」（寄与率9.62, $\alpha = 0.868$ ）、第三因子が「異性性－異性として魅力ある父」、第四因子が「過干渉（逆転して、大人として信頼してくれる父）」（寄与率3.30, $\alpha = 0.842$ ）となり、累積寄与率は54.42で、この4因子で全分散の50%以上を説明している。 α 係数からも見ても十分な内的整合性が得られている。

これらの因子得点を説明変数、自己受容得点（大出ら（1988））、自尊感情得点（山本ら（1982））を従属変数とする重回帰分析の結果、自己受容に関して、調整済み R^2 は1%水準で有意となり、4因子得点のうち「養い育てる父」の標準偏回帰係数 β が5%水準で、「異性として魅力ある父」「大人として信頼してくれる父」の偏回帰係数 β が1%水準で有意であったが、「異性として魅力ある父」の標準偏回帰係数 β は、負の関連であることが判明した（表3）。自尊感情得点に関しても調整済み R^2 は1%水準で有意であったが、4因子得点のうち標準偏回帰係数 β が有意であったのは、「大人として信頼してくれる父」のみであった。

4. 考察

以上、筆者らのゼミで5年間に亘って引き継がれ展開した父娘研究の流れと結果の概要を述べてきた。発端は上杉（2006）の、幼児・小児期における父母の愛情供給的身体接触が、女子青年の自己受容・自尊感情や攻撃性、向社会的行動頻度などの人格・行動特性にどのような関与をしているかを探るものであった。上杉は素朴な、いわゆるスキンシップを父親も母親と同様に行っているか、そして娘の人格や行動に母親からのものと同じような影響を及ぼすのか探りたいという動機から研究を行った。その結果は意外なもので、父親からの身体接触を多く回想した女子学生ほど自己肯定感が高く、向社会的行動が多く、攻撃性が低い傾向が見られたこと、一方、母親からの身体接触は多く回想する群も少なく回想する群も、自尊感情にあまり大きな相違はなかった。勿論、良好な父娘関係が娘の健康な人格形成に大きな影響を及ぼす研究結果は次々と現われている時期であり、そういう意味ではこの結果は驚くほどのものではないかもしれないが、父親のスキンシップが母親からのもの以上に娘に影響するという結果からは、やはり少なからぬ衝撃を得た。父親の愛情供給的身体接触が娘の自尊感情だけに影響するのか、息子にも同じような効果を示すのかは、男子青年を対象としたデータがないので不明であるが、父親の愛情供給が母親からのものとは異質な何かを娘の中に

表2 父娘関係尺度 因子負荷行列（最尤法，プロマックス回転後）（来島，2010）

質 問 項 目	因 子			
	1	2	3	4
父は私の健康のことを気づかう	.985			
父は私のことを応援してくれる	.917			
父は私のよいところを認めてくれる	.764			
父は私がしたいことを自由にやらせてくれる	.716			
父は私を褒めてくれる	.711			
父は私を大切にしてくれると思う	.687			
父は私のことを見守ってくれる	.629			
父は私の気持ちを理解してくれる	.620			
父は私がどういう気持ちでいるか察してくれる	.599			
父は私に気を遣ってくれているのだと感じる	.563			
父は私を信じてくれている	.529			
父は思いやりがある	.461			
父は私の相談にのってくれアドバイスをくれる	.429			
父の生きかたは立派だと思う		.904		
父を信頼している		.713		
父と社会の出来事などについて、よく話す		.687		
私は父と一緒にいて安心する		.655		
私は、母を愛している父が好き		.652		
父の仕事について話したり聞いたりすることがある		.646		
父を尊敬している		.625		
父は私が間違っているときに気づかせてくれる		.609		
父は自分の経験をよく話す		.588		
父と正直に話し合うことができる		.536		
*父は存在感があまりない		-.522		
父は私に人生や社会のことを教えてくれる		.519		
父は経済的に我が家を支えてくれたと思う		.434		
父のような人と付き合いたいと思う			.929	
父のような人と結婚したいと思う			.900	
父は異性としての魅力を感じることがある			.829	
父の話し方、声は素敵であると思う			.584	
父はカッコいいと思うときがある			.538	
「父はカッコよかったんだ」と思うことがある			.531	
私は父のような人間になりたい			.517	
*父はわがままで、まるで子どもだと思う			-.451	
私は、父のことを思うと心休まる思いがする			.448	
*父は私のすることに細かく口を出す				.732
*父は私に対して過干渉である				.714
*父は私の行動を制限しようとする				.703
*父は私が怠けていると叱る				.606
*家では、父の言うことは絶対だ				.584
*父は口うるさい				.559
*父は私の帰りが遅いというさく言う				.534
*父は私の異性関係について、よく口をだす				.487
*父は私の化粧や服装について注意する				.471
*父は私のことを子ども扱いしているように思う				.454
因子寄与率 (%)	35.79	9.67	5.67	3.30
累積寄与率 (%)	35.79	45.46	51.13	54.42
α 係数	0.942	0.868	0.862	0.842

*逆転項目

表3 自己受容得点, 自尊感情を従属変数, 4因子得点を説明変数とした重回帰分析結果 (来島, 2010)

説明変数	従属変数	標準偏回帰係数 β	
		自己受容	自尊感情
第1因子	養い育てる父	0.316*	0.211
第2因子	社会へつなぐ父	0.265	0.213
第3因子	異性として魅力ある父	-0.309*	-0.169
第4因子	大人として信頼してくれる父	0.234**	0.169*
重相関係数 R		0.407	0.339
調査済み R ²		0.166**	0.115**

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$

注ぎ込み, それが娘が自分を価値あるものとする自己受容の一つの源泉となっている可能性が鮮やかに浮かび出てきたのである。上杉の研究における親からの身体接触体験は回想によるものであり, その主要部分は実体験の記憶であろうが, 想像に基づくものもかなりあるに違いない。人の人格形成や感情や行動に及ぼす他者の影響は, 多くは対人関係ではなく対象関係の中で生じ, 影響を及ぼす他者は現実の他者そのものではなく, 表象としての他者であり, 被影響者の中に内在化されたものである。従って, 父娘関係の中の父も, 娘の中に関わりを通して内在化した表象としての父親である。篠原 (2009) は, この内在化した父を, 女子大学生の語りの中からえぐり出そうと試み, 質的分析によって父親像を構成する三つの柱を得た。それは, 親の機能の基盤をなす, 養い育て保護する特性 (養育性), 家庭人としてだけでなく社会的存在であり, 娘を社会への道案内する特性 (社会性), 娘とは性を異にする男性としての存在 (異性性) であった。そして, 父親からの愛情供給が母親からのもの以上に娘の自己受容に影響を与えるのは, 母親には少ない或いは全くない二つの特性, 社会性と異性性が付与されているからであるという仮説-3要因仮説-が立てられ, その仮説の数量的検討のために坂本 (2010) と来島 (2010) は父娘関係の尺度構成に挑戦した。その結果, 養育性, 社会性, 異性性に相当する3因子が確認され, その他, 他の研究者の手による尺度項目も取り入れたために, 干渉する父 (逆転して大人として信頼してくれる父) の因子が付加されて, これらの因子が揃って女性の自己受容に有意な関わりを持つ可能性が, 自己受容得点を従属変数とする重回帰分析によって確認された。

ところが, 来島 (2010) の分析によると, 「異性としての父親」は女子学生の自己受容に有意にかかわっているが, それは負の関連であった。この項目構成から

成る尺度が捉える異性としての父親は, 娘から魅力ある男性としてどの程度認知されているか, であり, 表面的なカッコよさや, 幼児的な「お父さんのような男性と結婚したい」というような感覚に近いものであると思われる。この種の男性的魅力は娘が感じる父親の異性性の一部に過ぎず, 娘と父親の男性性との関係はもっと複雑で奥深いものであろう。坂本 (2010) の研究では, この因子得点と自己受容得点とは正の関係にあったことから, 娘からみた父親の男性的魅力とは, かなりデリケートな, 不安定で両価的な性質を持つもののなのかもしれない。20歳を過ぎた女性が, 自分の父親はカッコよく, 自分もこんな男性と結婚したい, ということ自体, 様々な意味に解釈できる。娘にとっての父親の異性性については, 再び彼女たちの語りに戻り, 質的な探索を深めていくことが必要である。

さらに, 分析を進める中で起こってきた疑念は, 語りのデータから得た父親の3特性と, 作成された尺度の質問項目が捕らえる特性とがずれつつあるということである。生の語りの中の生き生きした父親イメージが, 質問紙の中では生気を失っている。これは数量的分析が可能な尺度の宿命なのであろうか。やはり何度も生の語りに戻り, データを集めて質的分析と数量的分析の間を行きつ戻りつすることが必要なのであろう。

また言うまでもないことであるが, 女性の自己受容, 自尊感情の形成には父親要因のみがかかわっているわけではない。父娘関係以外に成長の過程での様々な体験, 対人関係, 及び父親・母親の諸特性と密接に関係をもつ両親の夫婦関係, 母親との関係が相互に絡み合いながら娘の自己受容・自尊感情を形成していくことは明らかである。その中で, 父親との関係がどれほどの比重をもっているか, とりわけ, 女性の自己受容・自尊感情の基盤形成にどれほど関わっているかを抉り出してその姿を描き出す作業は, 非常に困難ではあるが, 極めて意義深い作業である。この作業は, これまで述べてきた一連の研究と同様, 質的分析と, 多変量解析を駆使した数量的分析を相互に組み合わせながら行われていくことになる。

最後に, 卒業論文, 修士論文作成のためのゼミナールにおいて, 一つのテーマを先輩から後輩へと引継ぎ, 発展させることができたことは, 筆者たちにとって大変充実した意義ある体験であった。一つのテーマを追い, 様々な分析の道具を用いて, まだまだほんの一部であるけれども, 父と娘の深淵をわずかでも覗き込み, 光をあてることができたことは, 自らにも深く関わる

テーマであるだけに、学生たちに心を科学することへの喜びをもたらし、探求への好奇心をかきたてたことと信じる。

文献

- 安藤明人・曾我祥子・山木勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子（1999）日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性・信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- 馬場謙一（1984）父とは何か－精神分析から見た父親－ 馬場謙一他編 父親の深層. 有斐閣, 1-32.
- Bowlby, J. (1969) Attachment and loss, Vol.1 : Attachment. London : Hogarth. 黒田実朗・大羽泰・岡田洋子（訳）母子関係の理論Ⅰ－愛着行動－ 1976, 岩崎学術出版社.
- Cole-Detke, H. & Kobak, R. Attachment Processes in Eating Disorder and Depression. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 1996, **64**, 282-290.
- Harlow, H.F. (1959) Love in infant monkey. Reading of Scientific American, 92-98.
- 石川嘉津子（1985）Self-esteemと両親像 日本心理学会発表論文集, **45**, 573.
- 石川嘉津子（1985）Self-esteemと両親像－女子の母親の受容性を軸として－ 京都大学教育学部紀要, **31**, 161-171.
- 春日由美（2000）日本における父娘研究の展望－娘にとっての父親－ 九州大学心理学研究, **1**, 157-171.
- 春日由美（2001）娘の心の中の父親像・父娘関係尺度作成の試み 日本教育心理学会発表論文集, **33**, 609.
- 菊池章夫（1988）思いやりを科学する－向社会的行動の心理とスキル 川島書店.
- 木下康人（1999）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂.
- 来島千穂（2011）青年期女性の父娘関係をめぐる臨床心理学的研究 広島文教女子大学大学院人間科学研究科平成22年度修士論文（未公開）
- Lamb, M.E. (1979) Paternal Influences and the Father's Role. A Personal Perspectives. American Psychologist, **34**, 938-943.
- 諸井克英（2006）女子青年における父親の魅力－父親との接触経験の影響－同志社大学総合文化研究所紀要, **23**, 71-80.
- 西沢義子・早川三野雄（1995）性役割観から捉えたか大学生の母性・父性意識 弘前大学教育学部紀要, **73**, 31-38.
- 小野寺敦子（1984）娘からみた父親の魅力 心理学研究, **55**, 289-295.
- 大出美知子・澤田秀一（1988）自己受容に関する一研究－様相と関連要因をめぐって カウンセリング研究, **20**, **2**, 42-51.
- Persons, T. & Bales, R. (Eds.) (1956) Family : Socialization and interaction process. Routledge and Kegan Paul.
- 坂本 萌（2010）女子大学生の自己受容と父娘関係の探索的研究 広島文教女子大学人間科学部心理学科平成21年度卒業論文（未公開）
- 佐藤公代・赤澤淳子・寺川夫央（1996）青年期女子における自我同一性と性役割意識に関する研究－将来希望するライフスタイルによる差異の検討を中心として－ 愛媛大学教育学部紀要, **42** (2), 47-60.
- 篠原稚恵（2009）自己受容の源泉としての父親－娘は父親をいかに内在化するか－ 広島文教女子大学大学院人間科学研究科平成20年度修士論文（未公開）
- 高木秀明・藤田仁美（1988）親子関係と青年の自己意識－自我同一性, 自尊感情とお関連－日本教育心理学会発表論文集, **30**, 360-361.
- 田辺敏明（1990）児童の父親同一視に関する一研究 日本教育心理学会発表論文集, **2**, 502-503.
- 徳田完二（1981）親子関係とSelf-esteem－高校生を対象として－日本心理学会発表論文集, **45**, 574.
- 辻井正次・中島啓之（1992）非行少年の両親像と心理的特性（Ⅱ）－両親像の再検討－ 犯罪心理学研究, **30**, 50-51.
- 上杉美和（2006）乳児期－児童期の両親からの身体接触と人間形成について 広島文教女子大学人間科学部心理学科平成17年度卒業論文（未公開）
- 上杉美和（2008）乳児期－児童期の両親からの身体接触と女子青年の自尊感情 広島文教女子大学大学院人間科学研究科平成19年度修士論文（未公開）
- 山口 創・山本晴義・春木 豊（2000）両親から受けた身体接触と心理的不適応の関連 健康心理学研究, **13**, 19-28.
- 山口 創（2003）乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響 健康心理学研究, **16**, 60-67.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の検討 教育心理学研究, **30**, 64-68.